飛耳長目

森信三先生参究誌

通巻１０９号　平成２４年１２月１日発行

「修身教授録」探求

経綸の情

■「楽翁公伝」

さて、この前お
おいた渋沢栄一
翁公伝」という書
すから、試験を
いま直ちにこれ
はいきますまい。
ただやがて試験
ぜひ一読するが
そも良書という
々の生涯を右せ
分岐点的意味を
すなわち我々が
良書を読むか読
路は常に左右さ
でしょう。かく
の人生航路を決
て良いのです。

■推薦の理由

では私が諸君に
するのはいかな
もそも楽翁公な
てのいわゆる教
公に冠せしめる
名称よりもむし

すなわち古来の真に偉大なる教育者の多くは、その経綸（けいりん）の大志の実現が阻止せられることを縁として深く教育の世界へ転じ来たった人々と言い得るのであります。

かくして真の教育者たらんと志す者は、単に所謂（いわゆる）狭義の教育者の伝記のみを見るだけでは実は足りないと思うのです。教育者たらんと欲（ほっ）する者が、自己の道の直接的先達たる偉大なる教育者の足跡を尋ねるということは、いわば当然過ぎる当然であって、真実には単にこれのみを以て足れりとは言えぬのであります。このことは例えば偉大なる教育者の一典型ペスタロッチーの生涯の上にも、その実例を見ることができるといえましょう。と申すのは、諸君もすでにご承知のごとくペスタロンチーは決して初めから教育者たらんと志した人ではなかったのであります。彼が最初に志したところは神学であり、しかも神学を学んだということは、実は宗教を通して貧しき人々を救済せんとするにあったのであります。しかるに血気盛んな青年ペスタロチーにとっては、人々の現実的苦悩を救うには、当時の形式化した宗教では到底その力無きことがしだいに思われてきたのであります。かくして彼の関心は次第に現実の社会改革の方向に向けられていったのでありますが、しかも現実人生の経験を重ねていくとともに、真に人間を救済するものは、いわゆる形式的なる宗教でないとともに、またいわゆる社会改革でもなくして

■政治と教

以上ペスタ
かなように、
本において
持っている
のではない
は、これを
いう二つの
う。

すなわち政
は内をも正
れに反して
をも正さん
てその現わ
来不可分の
ます。現に
う言葉もあ
教育家的情
熱を抱くと
いのであり

まい。かくして国民として正に最高か然から革の根本動力となる代りとなるか、諸君そのいずれを選ぶか以て突き付けられて

かくして諸君が今本の嘗て有した一個河楽翁公」の魂に触や諸君の生涯の上にない。国民教育者は以上の諸学校の教師方の現実と密接してには経綸家としてのわけです。この点中遊離しているのとはています。つまり中それ程でもありませめるということは実です。かくして私もとして、かねて経綸痛感していたのであ日まで教育者としてはすこぶる少ないの方面において卓れて大宗の「貞観政

「西郷南州翁遺

「氷川清話」および

かったのであります

人間の成長について（微言）

森　信三

○人間はときどき、骨身に徹して自己の愚かさを味うことが必要である。というのはそれによって、自己の浄化ができるからである。まさに自己の大掃除である。

○ある意味では、人間の考えることは大体似ていると言える。だがそれをどう表現するかということになると誰でも同じだとは言えない。況んやこれを行うにおいておやである。

○道無限…人生の行路もまた涯しがない。ここに人生の無限の悲しみと同時にまたその喜びも尽きる時がない。

○逆境のみが人間を偉らくすると主張するのは間違っているだろう。広い世間には、それほどまでに苦労せずとも、人間として出来上っている人が必ずしも無いわけではないから…。

○だがわれわれ下品の人間としては、結局は逆境苦難によって、一つ一つ人間的に鍛えられてゆく外ないようである。これは域る意味では口惜しいとも思うが、どうも仕方がない。

○他人を非難するのは、多くはその人の立場に対する察しの足りない場合が多い。書物などの批評も、非難するのは概してよく読んでいない場合が多い。

○自惚れごころから良い仕事のできないことはいうまでもないが、さりとてまた徒らに自卑していても、本当の仕事は出来るものでない。第一動力が出ない。

○自惚れと自卑の両面を超断する一境…ほんとうの仕事は、そこからのみ生れるであろう。だがこの一境に立つことの如何に困難なことか。とくにこの一境を持続することの…。

○如何なる人間も、生きんがためには何処かに多少の弱点をもつを免れぬようである。だが一体誰がこれをとがめ得るだろう。もっともここに生きるとは食うという方が或は適切な表現か知れないが…。

○本能というものほど尊とくも又、恐ろしいものはない。そこにわれわれは神と悪魔との両面を見る。

○逆覚は人間の心を緊きしめてくれる。ポカポカと太陽に照らされれば直ぐに脱ぐ外套も、寒風に吹かれては、離しようのないように…。

○ことば数が多いということは、その人の人間としての緊きしまりの足りなさを示すという外ない。たとへその人の才能が常人に越えるところがあったとしても…。

○もし自分の現在おかれている境遇を至幸と考える人があったら、その人は人生を最上に生きている人生の達人といってよい。

○前途に希望をもつことは良い。しかしその爲めに現在の境遇に不満不足がつきまとふようであってはならぬ。前途の希望は、今日一日を喜び、さらには感謝出来る心の展望し得る範囲のものでなくてはならぬ。

（「開顕」46号昭和26年2月号）

【あとがきに替えて】

本年も12月を迎え、何かと気忙しい季節になったが、相変わらず人間の成長は停滞のままを痛感する。情けないがこれが偽らざる本性である。昨年年賀状を辞す旨誌友の皆様にお伝えした。一年はますます早く感じる。実弟が夏に逝った。いつお迎えが来ても慌てない気概は持っているつもりである。今日一日を楽しく笑って過ごすことを是としつつ生きようと思う。

（29日二繁）

〒633－0003
桜井市朝倉台東2丁目538－89
電話・FAX 0744－45－34222
辟月 敏二
Eメール hiji3@kcn.jp
http://web1.kcn.jp/syushin/

第117回「かよう会」のご案内

日　時　平成２４年１２月１８日（火）
18時30分～（毎月第三火曜日原則）
場　所　四ツ橋ビル地下１階『会議室』
「電話」（四ツ橋ビル　管理事務所）
０６－６５３１－３６８６

交　通　地下鉄：四つ橋線四ツ橋駅下車
２番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。

テキスト　森 信三著「修身教授録」（致知出版）
２３００円（大きな書店で購入）

日時と講題

12/18立志
1/15人生二度なし
2/19生命の愛惜

参加費　１０００円